

## 作者捜しという回帰熱

Stephen Greenblatt, *Will in the World: How Shakespeare Became Shakespeare* (New York & London: W.W. Norton, 2004, 430pp.)

Brenda James, William Rubinstein, *Truth Will Out: Unmasking the Real Shakespeare* (Edinburgh: Pearson, Longman, 2005, xxiv + 360pp.)

### 境野 直樹

英国人の伝記好きは、ほとんど病的である。どこでもいい、ロンドンの書店の充実した伝記の棚の前に立ってみれば、かの国のひとびとが、さまざまな状況に置かれた無数の人間の生きざまにふれることで奮起したり、慰めを得たりすることを、読書の与えてくれる無上のよろこびと感じていることがすぐにわかる。

だからシェイクスピアの生涯についての確固たる情報が決定的に不足している状況に、かれらは苛立つのだ。自国の産んだ、およそ言葉で表すことができないことなど、彼にとってこの世にありはしないと思えるほどの、人類でもっとも雄弁な言葉の使い手についての伝記的情報がほとんど残っていない…詩や演劇作品の草稿はもちろん、一通の手紙すら残っていないとは！残されているのは劇場の権利証への自らの名字を綴り間違えた（そんなことがありうるだろうか）サインと、共同執筆者のいる演劇作品の草稿の断片のみである。

苛立ちはさまざまな憶測をもたらす。シェイクスピアにはほかにも隠された作品があるのではないか。高等教育を受けた記録が残っていないシェイクスピアにあのような天才的な作品群を書くことができたのはなぜか。そうした問いの果てに、もうひとつの問いがたてられるのも、だからあながち理解できないことではない…すなわち、シェイクスピアは、ほんとうはシェイクスピアではなかったのではないかと。

「シェイクスピア」が他の人物のペン・ネームであったとして、では誰がその正体か…この作者の正体探しは昔から、さまざまな「候補者」についての憶測とともに繰り返されてきた。代表的なものだけでも、Francis Bacon 説、第 17 代オックスフォード伯爵 Edward de Vere 説、Christopher Marlowe 説などがあるが、そのいずれも今日、シェイクスピア研究を生業とする者には、まずまともに考察の対象として取り上げられることはない。（興味のある向きは、インターネ

ットで Shakespeare, authorship をキーとして検索してみるとよい。) James & Rubinstein の著作は、これら別人説への新説の参入である。1594年12月28日、*A Comedy of Errors* の Gray's Inn での上演の記録があるが、同じ日にシェイクスピアの名前がみえる劇団が、グリニッジで興業をしている。多くのシェイクスピア学者はこの記録について日付の間違いなどと主張するが、これは間違いではない、Gray's Inn にこそ、ほんとうの「シェイクスピア」がいたのだ、というのが、Rubinstein の議論の出発点である。これについては、同日の上演にたいして、二つの劇団が支払いを受けた記録が残っているので、当然ながらどちらか一方が間違いであるとの指摘がただちになされた。

(<http://www.socialaffairsunit.org.uk/blog/archives/000600.php>参照)。ともあれ英文学最大の市場をもつ作家の正体についての新説は、例によって注目をもって迎えられた。それよれば、シェイクスピアの歴史劇『ヘンリー八世』の細部には、宮廷内の事情に精通していなければ知り得ない情報が描かれており、このことから、ストラトフォード出身の教養のない田舎者がこれを書いたはずはないということになる。彼らの主張によれば、『ヘンリー八世』を書けた実在する人物は、ただひとり、Sir Henry Neville(c. 1562-1615)であるというのだ。(ネヴィルの名前は、じつは 1867 年に発見されシェイクスピア=ペーコン説の擁護者たちに論拠を提供することとなった、なにやら出自も謎めいた Northumberland Manuscript の冒頭近くにみえるのだが、これまで注目されることはほとんどなかった。) この新(珍)説は *New York Times* および *Times Online* (October 05, 2005, <http://www.timesonline.co.uk/article/0,,2-1811620,00.html>) で大々的に紹介された。マスメディアの加担はいつも、シェイクスピアの周辺の問題を(多くの場合、確認作業以前に)大げさに取り上げすぎるきらいがある。(他方で、インターネットブログのような速報性、機動性ともにすぐれた小さなメディアからの批判、異議申し立ても多い。本稿執筆時点で、James & Rubinstein にたいしてもっとも精力的な反論を展開しているもののひとつとして、[http://stromata.typepad.com/stromata\\_blog/2005/09/a\\_new\\_shakespea.html](http://stromata.typepad.com/stromata_blog/2005/09/a_new_shakespea.html) をあげることができる。) 評者としては、James & Rubinstein の説は、まったく唐突に降ってわいたような話という印象をぬぐえず、少なくとも一読したところでは、Neville の個々の伝記的情報についてすべてを鵜呑みにしたと仮定しても、そこからシェイクスピアまでの飛躍にどうしてもついて行けない。そればかりではない、上述の Stromata blog で Tom Veal も指摘するように、たとえばギリシ

ア神話の誤読といった、文学研究者としての見識を疑いたくなるような記述が散見されて、これだけでも放り出してしまうのは事実である。

1990年代、作者不詳の詩、'Shall I die'と *Funerall Elegye* をシェイクスピア作であるとみなす、いずれも高名な研究者による、魔が差したとしか思えないようなスキャンダラスな事件があったが、いずれもマスメディアがこれを煽り立て、1986年のオックスフォード版シェイクスピア全集がそれまでの本文の成立状況に真っ向から異議申し立てをしてキャノンの揺さぶりをかけたばかりというタイミングもあって、多くの研究者たちもこれに惑わされた。Riverside版、Norton版という、代表的な権威ある全集にもこれらの詩が収録されたが、結果的にはどちらもシェイクスピアの作品ではないことが明らかになったのであった。他方、それまで *Apocrypha* のひとつとして扱われたけた劇、*Edward III* については、コンピュータ解析の成果もあって、すくなくとも部分的にシェイクスピアの手が入っているとして、これも全集に加えられた。こうしたキャノンの再編成の活性化と同期をとるかのごとくに、シャーロック・ホームズばりのシェイクスピアの「正体」を探る熱病は、いま、じつに18世紀以来、その何度目かの発作のさなかにあるといつてよい。だが、その狂騒を勘案したとしても、James & Rubinstein はもはや、末期症状と言えるのではないか。

2004年にはシェイクスピアの生涯を新歴史主義の旗手、Stephen Greenblatt が、手慣れた手法でかすかな断片的資料から、この天才劇作家・詩人の創作の源泉をさぐる伝記的考察を出した。これは当時のストラトフォード、ロンドンの様々な記録を手がかりとして、シェイクスピアがそれらの小さな出来事をどう自分の人格形成と作品の反映させていったかを再構成する試みである。大学で教育を受けなくても、宮廷に出入りしなくても、劇作家の知識と想像力は十分に蓄積されていったのだという主張が、そこには展開されている。例によって一見些末で相互に無関係と思えるいくつかの小さな記録が呼応しあい、やがてはひとつの歴史的ヴィジョンへと結実するおなじみの新歴史主義的手法で、時代と作家と作品があたかも必然的な一本の線で結ばれるかのごとく描き出されてゆく。一例をひけば、1575年の Hock Tuesday、エリザベス女王を歓待するレスター伯主催の余興で、イルカの背に乗るエアリオンを描いた大がかりな仕掛けが披露された記録があるが、これをおそらくは見たであろう少年シェイクスピアが、のちに *Twelfth Night* や *A Midsummer Night's Dream* に、このときの情景を反映させているといった具合である。要約してみるといかにも強引な帳尻あわせの構成が目立つけ

れども、これを面白く、さも見てきたような話に仕立て上げて読ませてしまうところが Greenblatt の力業だろう。父親 John の成功と挫折の「物語」を再構成しておいて、*Non Sans Droit* の紋章獲得のエピソードを感動的な家系の復権の物語に仕立て上げるあたりも「物語への情熱」は健在である。無論、胡散臭いところは多々あり、疑いだしたらきりが無い。だがこれはこういう本なのだろう。すなわち歴史家が書いた娯楽として、読むべきものなのだ。それはたとえば、Anthony Burgess の *Shakespeare* や、さらに敷衍すれば、Tom Stoppard の『恋に落ちたシェイクスピア』のような性格のものだろう。「手堅い立証」をめざすのではなく、わずかに残された手がかりから想像力を飛翔させて書かれた、我が国の文芸でいうところの歴史小説。巻末付録の書誌情報が、学術書の体裁を取っていないことも、著者によるこの本の位置づけについての意思表示として読める。くどいようだが、それ以上ではありえない。なにしろ立証する方法はないのだから。

文学史、文化研究の成果としての小さな手がかりを丹念に積み上げて書かれた Greenblatt の本と並べると、James & Rubinstein の主張はいかにも分が悪い。Edward de Vere をシェイクスピアの正体だとするいわゆるオックスフォード協会の人々が、シェイクスピア作品の一節と呼応する箇所アンダーラインがひかれた聖書をほぼ唯一の根拠として出発したのに似て、Neville 説も、否定できる証拠がないというだけの理由で、主張されているからだ。いうまでもなく、「不在」であることというのは、もっとも証明することが難しい命題である。しかも上述したように、*The Truth Will Out* には不正確な記述が多い。要するに、「可能性」にもとづく仮説という共通点が一見あるようにみえて、James & Rubinstein と Greenblatt は、ほぼ正反対を向いている。

シェイクスピアに纏わる逸話を書くことは、どうあっても「可能性」を手がかりにした物語（虚構）を書くことでしかない。それは「伝記」がひそやかに継承してきた、歴史と虚構の関係を物語内容と物語言説の関係へとずらす営みともいえる。「死者との対話への欲求」を出発点とした Greenblatt の新歴史主義がたどりついたところが、文学が歴史言説の特権を解体することで獲得したテキストのユートピアだとしたら、生身の人間としてのシェイクスピアの正体を追い続ける James, Rubinstein の仕事は、たとえどれほど状況証拠を積み上げたところで、文学研究の立場からみても、またそれじたいを物語として評価してみても、不毛な結論にしかたどりつけない。なぜ、教養もろくにない田舎者にあれらの傑作が

書けたのかという人間の可能性をめぐる物語のほうが、それらすべての可能性をあきらめて別人捜しをする物語よりも、はるかに魅力的だからだ。

S. Schoenbaum の *Shakespeare's Lives*, (Oxford, 1991) は、入手できる最初期のものから 20 世紀にいたる、シェイクスピアに関する伝記的情報とその批評的見解の集大成である。今回取り上げた 2 冊の本をバランス感覚を失わずに読む為の補助線として、大著ながら、きわめて有益であった。「シェイクスピアの伝記」は、あきらかにそれ独自の文学ジャンルを形成している。それを Bardolatry だと言ってしまえばそれまでのことだろう。しかし、ソネットや芝居の一節に、ふと人間存在の普遍的な問題への圧倒的な洞察と出会うとき、わたしたちはその言葉を生み出した知性に思いを馳せずにはいられない。作者捜しが絶望的な負け戦と知りつつも、踏み出さずにはいられないひとびとへの、この謎に満ちた作者による誘惑は、まだ続いているのだ。

(岩手大学教育学部英語教育講座)